

III 果 樹

1. ナ シ

(1) 北星（北農1号）

来歴 「北星」は、北海道農業試験場において、1939年（昭14）「身不知」を母とし、「二十世紀」を父として、人工交配した実生から選抜された1系統である。「14-10」の旧系統名で生産力検定を行っていたが、1958年（昭33）に「北農1号」に改称した。1966年（昭41）に優良品種に決定し、農林省に新品種「北星」（ナシ農林5号）と命名、登録された。

特性概要 1. 中生種で札幌地方では9月下旬に成熟期となり、食用適期は10月20日ころまでである。

2. 果実は紡錘形で果皮は緑黄色を呈し、平均果重は250g内外で肉質はやや粗であるが、果心が小さく、やや甘味に乏しいが品質は良い。

3. 樹勢は中等で開張性、耐寒性は「長十郎」程度と見込まれる。

栽培適地と奨励態度 「北星」は中生種であるが、耐寒性はやや弱く「長十郎」程度と見込まれることから、その適応範囲は比較的狭く、「長十郎」の栽培されている地域とする。

試験場名	1 樹当り収穫果数(個)							1 樹当り収穫果重量(kg)							糖度*
	年次 5	6	7	8	9	10	11	年次 5	6	7	8	9	10	11	
北海道農試	3	28	57	94	104	136	141	0.8	7.9	14.5	22.6	28.0	34.2	34.5	11.6

* 糖度は屈折糖度計示度

(2) 北都（北農2号）

来歴 「北都」は、北海道農業試験場において、1939年（昭14）「二十世紀」を母とし、「身不知」を父として、人工交配した実生から選抜された1系統である。「24-9」の旧系統名で生産力検定を行っていたが、1958年（昭33）に「北農2号」に改称し、1966年（昭41）に優良品種に決定し、「北都」と命名した。

特性概要 1. 中生種で札幌地方では9月下旬に成熟期となり、10月末まで食味良好である。

2. 果実は不整な短紡錘形で果皮は白緑黄色を呈し、平均果重は230g内外で肉質はち密、多汁であり、果心が小さく、且つ甘味が強く香気があり品質は最上である。

3. 樹勢強く開張性で栽培容易であるが、盛果期に達する樹令がやや遅く、収量も中程度である。耐寒性は「身不知」に近い強さがあると見込まれる。

栽培適地と奨励態度 「北都」の耐寒性は「身不知」に近く、中生種であり、品質も最上であることから、その適応範囲は比較的広く、「身不知」の栽培されている地域とする。

試験場名	1 樹当り収穫果数(個)							1 樹当り収穫果重量(kg)							糖度*	
	年次	5	6	7	8	9	10	11	年次	5	6	7	8	9	10	11
北海道農試	2	15	41	99	102	143	162	0.5	3.7	9.5	24.0	25.2	32.1	33.6	13.1	

・糖度は屈折糖度計示度

2. ブドウ

(1) バッファロー (Buffalo)

来歴 「バッファロー」は、アメリカニューヨーク農業試験場において、「ハーバート」×「ワトキンス」の交配(1921年)により育成され、1949年に登録された品種である。本道へは1962年(昭37)に導入した。その後北海道立中央農業試験場で試験を行い、1966年(昭41)優良品種に決定した。

特性概要 1. 樹勢は比較的旺盛で、新梢はよく伸び、節間長も長くなる。副梢の発生は多く、放任すれば旺盛に伸びる。樹冠の拡性は比較的大である。

2. 葉の大きさは中位で、薄い。裏面の綿毛は白く少ない。葉縁の切れ込みは浅く、葉柄裂刻は狭く、閉じていることが多い。

3. 新梢は緑色で毛茸少なく、滑らかである。

4. 巻きひげは断続性である。

5. 花穂は1新梢に2~3房つく。花は自家結実性で、雄蕊直立である。

6. 秋期の枝の登熟はやや遅く、耐寒性はやや劣る。

7. 果実の熟期は9月下旬~10月上旬である。

8. 果房は円錐形で、果房重は200~250g程度である。粒着はかなり疎着である。脱粒は少ない。

9. 果皮色は紫黒色で、果粉は多い。果粒形は円で、果粒の大きさは中位である。

10. 果汁の糖度、酸度は共に高いため食味は濃厚である。また狐臭とは異なる独特の香りを有する。

11. ジベレリン処理により種なしとなり、熟期は9月上・中旬となる。また果粒形は長円形になる。

栽培適地と奨励態度 栽培適地 道央南部以南

栽培上の注意

1. 耐寒性がやや劣るので、強剪定、結実過多にならないようにする。

2. 栽培土壌としては、排水が良く、保水力をもった土壌に適する。

3. 成らせずぎや早採りは酸味が強くなるので慎む。

4. 病害虫については、他品種と特に異なる点はないので、薬剤散布は防除基準に従う。

試験場名	樹 齢	開 花 期	収 穫 期	収 量	平均房重	糖 度	酸 度
中央農試	4	月日 7.10	月日 10.5	kg/樹 10	g 200	% 19.3	g/100ml 1.40

・1965年調査

3. リンゴわい性台木

(1) EMⅨ(M9)

来歴 「M9」は、ヨーロッパにおいて古くから使われていた台木を英国のイースト・モーリング試験場で分類し、1930年(昭5)命名発表したEM系台木の1系統である。わが国への導入は、北海道大学が昭和の初期にイースト・モーリング試験場から入れたのが最初といわれる。青森県りんご試験場がドイツより1958年(昭33)、北海道立中央農業試験場がカナダより1963年(昭38)それぞれ再導入した。道内における適応性を検討した結果、すぐれた特性をもつことが認められたので、1972年(昭47)優良(準奨励)品種に決定した。

特性概要 1.枝は、真直で、生育期には、はっきりした銀色の光沢があり、赤黄色である。葉は、大きく、長円形で丸みがかった扇形の鋸歯があり、表面が光っており、直立性である。

2.耐寒性は、「マルバ」「ミツバ」よりやや弱い。

3.各穂品種とも接木後の親和性は良好である。

4.接木後穂品種の発育程度は、「マルバ」「ミツバ」よりかなり小さく、樹令が進む程差は大きくなりわい性となる。

5.結実開始は「マルバ」「ミツバ」よりかなり早く、1樹当りの収量は少ないが、栽植密度の増加により10a当収量は多くなる。10a当樹数は「マルバ」「ミツバ」台の3～4倍程度である。

6.着果した果実の品質は非常に良好であり、「マルバ」「ミツバ」台の果実より熟度はかなり進む。

栽培適地と奨励態度 現在のりんご産地全道一円に適応する。栽培上の注意としては、根がもろく倒伏しやすいので樹体に永久的な支柱を用いること。

試験場所	穂 品 種	台	10a 当樹数	幹 周	1 樹当り収量	10a 当収量	果実糖度
中 央 農 試	ス タ ー キ ン グ	M 9	111	23.8	21.5	2,386	14.9
		マルバ	31	36.8	41.3	1,280	12.9
	旭	M 9	111	19.0	32.0	3,552	12.7
		ミツバ	31	36.1	34.2	1,060	11.6
	レ ッ ド ゴ ー ル ド	M 9	111	22.5	55.2	6,127	14.6
		ミツバ	31	39.7	50.3	1,559	13.0

注 幹周：8年生(1971年)

収量：樹齢8年生までの合計(1967～71年)

糖度：屈折糖度計示度(1970～71年平均)

(2) EMⅦ(7)

来歴 「M7」はヨーロッパにおいて古くから使われていた台木を英国のイースト・モーリング試験場で分類し、1930年(昭5)命名発表したEM系台木の1系統である。わが国への導入は、北海道大学が昭和初期にイースト・モーリング試験場から入れたのが最初といわれる。青森県りんご試験場が1959年(昭34)英国より、1963年(昭38)北海道立農業試験場がカナダよりそれぞれ再導入した。道内における適応性を検討した結果、すぐれた特性をもつことが認められ

たので、1972年（昭47）優良（準奨励）品種に決定した。

特性概要 1. 枝は細くしなやかで節間は長く、赤紫色で皮目は明瞭である。葉はうすく円形で低い位置のものは浅裂がある。葉柄は直立型である。

2. 耐寒性は強い方で「マルバ」「ミツバ」と同じ程度である。

3. 各穂品種とも接木後の親和性は良好である。

4. 接木後、穂品種の発育程度は、「マルバ」「ミツバ」より小さく、樹令が進む程差は大きくなり半わい性となる。

5. 結実開始は、「マルバ」「ミツバ」より早く1樹当りの収量は少ないが、栽植密度の増加により10a当収量は多くなる。10a当樹数は、「マルバ」「ミツバ」の2倍程度である。

6. 着果した果実の品質は良好であり、「マルバ」「ミツバ」台の果実より熟度はやや進む。

栽培適地と奨励態度 現在のりんご産地全道一円に適応する。

栽培上の注意として、支柱を用いること、幼木時代は特に剪定を弱くして誘引を主体とし早期結実をはかること。

試験場所	穂品種	台	10a当樹数	幹周	1樹当り収量	10a当収量	果実糖度
中央農試	スターキング	M 7	63	34.6	21.3	1,342	13.2
		マルバ	31	36.8	41.3	1,280	12.9
	旭	M 7	63	30.7	42.7	2,690	11.6
		ミツバ	31	36.1	34.2	1,060	11.6
	レッドゴールド	M 7	63	35.7	49.0	3,087	13.9
		ミツバ	31	39.7	50.3	1,559	13.0
	紅玉	M 7	63	30.2	55.7	3,509	14.1
		ミツバ	31	37.4	76.6	2,374	13.4

注 幹周：8年生（1971年）

収量：樹齢8年生までの合計（1968～71年）

糖度：屈折糖度計示度（1970～71年の平均）

(3) MM111

来歴 英国のジョン・インネス試験場とイースト・モーリング試験場の共同研究によって、M系と主に「ノーザンスパイ」種を交配し、綿虫抵抗性台木として育成され1953年（昭28）MM系として発表されたものの1つである。「MM111」は「ノーザンスパイ」×「M793」である。わが国への導入は、1959年（昭34）青森県りんご試験場が英国より、1963年（昭38）北海道立農業試験場がカナダより、1966年（昭41）農林省園芸試験場盛岡支場が英国よりそれぞれ導入した。道内における適応性を検討した結果、すぐれた特性をもつことが認められたので、1972年（昭47）優良（準奨励）品種に決定した。

特性概要 1. 枝は太く生育旺盛、芽は不整形で灰色、葉は、鋸歯はあらく、先端は赤い。葉柄の基部はでこぼこしている。

2. 耐寒性は強く、強健である。

3. 各穂品種とも接木後の親和性は良い。

4. 接木後穂品種の発育程度は、「マルバ」「ミツバ」とほぼ同じ程度である。

5.結実開始は「マルバ」「ミツバ」よりやや早い。「旭」「レッドゴールド」のように高接病ウィルス保毒率が高く「マルバ」台の使用が一般的でない品種では、「ミツバ」台に比し、かなり多収である。

6.着果した果実の品質は良好であり、「マルバ」「ミツバ」台果実と熟期は同じ程度である。

栽培適地と奨励態度 現在のりんご産地全道一円、特に多雪、寒地に適応する。栽植樹数は「マルバ」「ミツバ」台と同じ程度、根群の発達が良好であり、永久支柱は必要ない。

試験場名	穂品名	台	10a当樹数	幹周	1樹当り収量	10a当収量	果実糖度
中央農試	スターキング	MM 111	31	41.2	38.8	1,202	12.6
		マルバ	31	36.8	41.3	1,280	12.5
	旭	MM 111	31	37.7	54.7	1,696	11.3
		ミツバ	31	36.1	34.2	1,060	11.6
	レッドゴールド	MM 111	31	39.9	68.8	2,133	13.1
		ミツバ	31	39.7	50.3	1,559	13.0

注注 幹周：8年生（1971年）

収量：樹齢8年生までの合計（1968～71年）

糖度：屈折糖度計示度（1970～71年平均）

4. ハイブッシュブルーベリー

(1) ジューン (June)

来歴 本品種は、アメリカのニュージャージー州ホワイツボグで（「ブルックス」×「ラッセル」）を母とし、「ルーベル」を父として1919年（大8）交配され、1930年（昭5）アメリカで発表された。

1963年（昭38）、北海道立農業試験場（種芸部）がカナダより導入し、本道における適否を検討した結果、1974年（昭49）優良（準奨励）品種に決定した。

特性概要 1.早生種で、長沼で4月下旬から5月上旬に発芽し、5月中旬から5月下旬に開花し始める。

果実は7月中旬から下旬にかけて着色し始めるが、同じ早生種の「ウェイマウス」に比べて開花期から着色期までに要する期間が長い。熟した果実より採取するが、8月上旬頃最も収量が多く、その後徐々に少なくなる。

2.花芽の着生多く多収である。

3.果実の大きさは1.4g程度で中位である。1果重は採取時期の早いもの程大きく、時期を追って低下してゆくが、この低下度合が本品種は大きい傾向にある。果形はやや扁平で、果皮色は熟すると濃藍となる。

4.樹体は大きく、樹勢は中位で、樹姿はやや開張性である。

5.凍害には強い方である。

6.キャンカー様の病害にある程度罹病するが許容できる範囲である。

栽培適地と奨励態度 道央以南の地域に新しい果樹として導入。

試験場名	樹 齢	発芽期	開花始	着色始	樹 高	樹 巾	収量/樹	1果重	糖 度
	年	月日	月日	月日	cm	cm	kg	g	%
中央農試	13	4.28	5.25	7.25	160	155	1,809	1.4	11.5

- 注 1. 樹齢は1972年時点において示す。
 2. 発芽期は1970～1972年の3年間の平均を示す。
 3. 着色始、収量、1果重、糖度は1969～1972年の3年間の平均を示す。
 4. 開花始は1966～1972年の7年間の平均を示す。
 5. 樹高、樹巾（列間、樹間平均）は1972年調査。

(2) ウエイマウス (Weymouth)

来歴 本品種は、アメリカのニュージャージー州ウエイマウスで「ジューン」を母とし、「キャボット」を父として1928年（昭3）交配され、1936年（昭11）アメリカで発表された。

1956年（昭31）北海道農業試験場が福島県園芸試験場より、1963年（昭38）北海道立農業試験場（種芸部）がカナダよりそれぞれ導入し、本道における適否を検討した結果、1974年（昭49）優良（準奨励）品種に決定した。

特性概要 1. 早生種で、札幌で4月下旬から5月上旬に発芽し、5月下旬から6月上旬に開花し始める。

果実は7月中旬から7月下旬にかけて着色し始め、熟した果実より収穫してゆくが、8月上旬頃が収穫盛期となる。

2. 収量は多収である。

3. 果実の大きさは採取時期の早いもの程大きい傾向にあるが、平均して1.7g程度で、「ハーバート」程ではないが大きい方である。果形はやや扁円で、果皮色は熟すると濃藍となる。

4. 新梢が細く樹体は小さい。樹勢は弱く、樹姿は開張性である。

5. 凍害による枝の先枯れは、「ハーバート」よりも少なく耐凍性は高い。

栽培適地と奨励態度 道央以南の地域に新しい果樹として導入。

試験場名	樹 齢	発芽期	開花始	着 色 始	樹 高	樹 巾	収量/樹	1果重	糖度	調査年次
	年	月日	月日	月	cm	cm	kg	g	%	
北海道農試	14	4.25	5.27	7月中～下旬	134	188	2,045	1.7	12.5	1970～1973
中央農試	13	4.28	5.25	7.22	100	115	587	1.5	11.0	

- 注 ・ 樹齢は1972年時点において示す。
 ・ 樹高、樹巾（東西南北平均）は1971～1973年の3年間の平均を示す。
 ... 1. 樹齢は1972年時点において示す。
 2. 発芽期は1970～1972年の3年間の平均を示す。
 3. 着色始、収量、1果重、糖度は1969～1972年の3年間の平均を示す。
 4. 開花始は、1966～1972年の7年間の平均を示す。
 5. 樹高、樹巾（列間、樹間平均）は1972年調査。

(3) ハーバート (Herbert)

来歴 本品種は、アメリカのニュージャージー州ウェイマウスで「スタンリー」を母とし（「ジャージー」×「パイオニア」）を父として1932年（昭13）交配され、1952年（昭27）アメリカで発表された。

1956年（昭31）北海道農業試験場が福島県園芸試験場より導入し、北海道における適否を検討した結果1974年（昭49）優良（準奨励）品種に決定した。

特性概要 1. 中生種で、札幌で4月下旬から5月中旬に発芽し、6月上旬から中旬にかけて開花し始める。

果実は8月上旬から中旬にかけて着色し始め熟した果実より収穫するが、その期間が約1か月続く。

2. 収量は樹あたり1kg程度で多い方である。

3. 果実の大きさはブルーベリーとしては大きく、大きいものでは一果重4gを超える。果形は円で、果皮色は熟すると濃藍となる。

4. 樹体は大きい方で、樹勢は中位である。樹姿は「ウェイマウス」程ではないが開張性である。

5. 耐凍性は高い方であるが、「ウェイマウス」よりは、凍害による枝の先枯れが多いようである。

栽培適地と奨励態度 道央以南の地域に新しい果樹として導入。

試験場名	樹 齢	発芽期	開花期	着 色 始	樹 高	樹 巾	収量/樹	1果重	糖度	調査年次
	年	月日	月日	月	cm	cm	kg	g	%	
北海道農試	20	5. 8	6. 5	8月上～中旬	165	170	1,160	2.0	11.8	1970～ 1973

・ 樹齢は1973年時点において示す。

・ 樹高、樹巾（東西、南北平均）は1971～1973年の3年間の平均を示す。

(4) ランコカス(Rancocas)

来歴 本品種は、アメリカのニュージャージー州ホワイツボグで「ジューン」と同じく（「ブルックス」×「ラッセル」）を母とし、「ルーベル」を父として1915年（大4）交配され、1926年（昭1）アメリカで発表された。

1963年（昭38）北海道立農業試験場（種芸部）がカナダより導入し、本道における適否を検討した結果、1974年（昭49）優良（準奨励）品種に決定した。

特性概要 1. 中生種で、長沼で4月下旬から5月上旬に発芽し、5月下旬から6月上旬に開花し始める。

果実は7月下旬から8月上旬にかけて着色し始め、熟した果実より採取するが、8月上旬頃最も収量が多く、その後徐々に少なくなる。

2. 「ジューン」程ではないが花芽の着生多く多収である。

3. 果実の大きさは1.3g程度で中位で、採取時期の早いもの程大きい傾向にある。果形はやや扁円で、果皮色は熟すると濃藍となる。果実の糖度は12～13%程度で高い方である。

4. 樹体は大きく、樹勢は中位で、樹姿はやや開張性である。

5. 耐凍性は「ジューン」と同程度で強い方である。

6. キャンカー様の病害にある程度罹病するが、許容できる範囲である。

栽培適地と奨励態度 道央以南の地域に新しい果樹として導入。

試験場名	樹 齢	発芽期	開花始	着色始	樹 高	樹 巾	収量/樹	1果重	糖 度
	年	月日	月日	月日	m	cm	kg	g	%
中央農試	13	4.29	5.28	7.29	145	143	849	1.3	12.6

- 注 1. 樹齢は1972年時点において示す。
 2. 発芽期は1970～1972年の3年間の平均を示す。
 3. 着色始、収量、1果重、糖度は1969～1972年の3年間の平均を示す。
 4. 開花始は1966～1972年の7年間の平均を示す。
 5. 樹高、樹巾（列間、樹間平均）は1972年調査。

5. グースベリー

(1) ピックスウェル (Pixwell)

来歴 米国、ノースダコタ州農業試験場で「リベス ミズリエンシス」×「オレゴン チャンピオン」から育成され、1932年（昭7）発表された。北海道農業試験場が1961年（昭36）東北農業試験場（園芸部）から本種の配付を受け、試作を続けた結果、すぐれた特性をもつことが認められたので、1976年（昭51）優良（準奨励）品種に決定した。

特性概要 1. 樹勢強く、新梢は太く数も多い。やや開張性で樹高は約1.6mになる。

2. 熟期は7月下旬である。

3. 収量はひじょうに多く、1株当たり10kgに達する。

4. 果実はやや円形をしており、大きさは中位で平均果重は約2.4gである。成熟すると紫紅色となる。

5. 糖度は「ホートン」よりはやや低いが、その他の品種の中では高い方である。

6. ウドンコ病にはひじょうに強いが、斑点病には弱い方である。

7. 耐寒性は強い。

栽培適地と奨励態度 耐寒性が強いので北海道の全域で栽培できよう。土壌に対する適応性は広いが、排水の良い粘質がかった土壌が適する。

試験場所	樹 高	樹 勢	樹 姿	満開期	成熟期	1株収量	1果重	果 形	果色	糖度	試験期間
	m			月日	月日	kg	g			%	
北海道農試	1.6	強	やや開張	5.17	7.30	10.4	2.4	円	紫紅	13.2	1965～1975

- 注 1. 数値はいずれも1972～1975の4年間の平均値
 2. 糖度は屈折糖度計の示度

(2) グレンダール (Glennedale)

来歴 米国、ニュージャージー州において、グロスラリア ミズリエンシスに栽培種を2代交配、3代目に「キープセーク」を交配したものからW.V.フリート氏が1905年（明38）に選抜した。その後U.S.D.A.により適応性試験が行われ、1932年（昭7）発表された。

北海道農業試験場が1961年（昭36）東北農業試験場（園芸部）から本種の配付を受け、試作を続けた結果、すぐれた特性をもつことが認められたので、1976年（昭51）優良（準奨励）品

種に決定した。

- 特性概要 1.樹勢強く、新梢太く数も多い。やや開張性で、樹高は1.7m程度になる。
 2.熟期は7月下旬である。
 3.収量は「ピックスウェル」に次いで多く、1株当たり約8.5kgである。
 4.果実は円形をしており、大きさは中位で平均1果重は3g程度である。成熟すると紫紅色となる。
 5.糖度はやや高い方である。
 6.ウドンコ病にはひじょうに強く、斑点病にも強い。
 7.耐寒性は強い。

栽培適地と奨励態度 耐寒性が強いので、北海道の全域で栽培できよう。土壌に対する適応性は広いが、排水の良い粘質がかった土壌が適する。

試験場所	樹 高	樹勢	樹 姿	満開期	成熟期	1株収量	1果重	果 形	果色	糖度	試験期間
	m			月日	月日	kg	g			%	
北海道農試	1.7	強	やや開張	5.14	7.30	8.5	3.3	円	紫紅	12.5	1965～1975

- 注 1. 数値はいずれも1972～1975の4年間の平均値
 2. 糖度は屈折糖度計の示度

(3) ホートン (Houghton)

来歴 米国、マサチューセッツ州でA.ホートン氏が米国種と欧州種との雑種から選抜したもので、1852年発表された。わが国へは明治初年に開拓使により導入された。その後道内で「在来種」として栽培されていたものを、北海道農業試験場が収集し、試作の結果、同種が「ホートン」種であることを同定した。またすぐれた特性をもつことが認められたため、1976年（昭51）優良（準奨励）品種に決定した。

- 特性概要 1.樹勢はやや強く、新梢は細いが数は多い。樹姿はやや開張性で、樹高は低く1.2m程度である。
 2.熟期は7月下旬である。
 3.収量は多く、1株当たり約8kgである。
 4.果実は円形をしており、大きさはやや小さめで平均果重は2g程度である。成熟すると暗赤色となる。
 5.糖度は高い。
 6.ウドンコ病には強い方であるが、斑点病には弱い。
 7.耐寒性は強い。

栽培適地と奨励態度 耐寒性が強いので、北海道全域で栽培できよう。土壌に対する適応性は広いが、排水の良い粘質がかった土壌が適する。

試験場所	樹 高	樹勢	樹 姿	満開期	成熟期	1株収量	1果重	果 形	果色	糖度	試験期間
	m			月日	月日	kg	g			%	
北海道農試	1.2	やや強	やや開張	5.16	7.30	8.0	2.0	円	暗赤	14.3	1965～1975

- 注 1. 数値はいずれも1972～1975の4年間の平均値
 2. 糖度は屈折糖度計の示度

(4) オレゴン チャンピオン (Oregon Champion)

来歴 1860年頃米国オレゴン州でP.ブレティマン氏が「クラウン ホブ」×「ホートン」の交配から作出し、1909年(明42)発表された。北海道農業試験場が1961年(昭36)東北農業試験場(園芸部)から本種を入手し、その後試作を続けた結果、すぐれた特性をもつことが認められたので、1976年(昭51)優良(準奨励)品種に決定した。

特性概要 1.樹勢はやや強く、新梢は細いが数は多い。樹姿はやや開張性で、樹高は低く1.2m程度である。

2.熟期は7月下旬である。

3.収量は中位で、一株当たり5kgあまりである。

4.果実は円形をしており、大きさは中位で平均果重は2.5g程度である。成熟すると緑黄色となる。

5.糖度は高い。

6.ウドンコ病には強い方であるが、斑点病には弱い。

7.耐寒性は強い。

栽培適地と奨励態度 耐寒性が強いので、北海道全域で栽培できよう。土壌に対する適応性は広いが、排水の良い粘質がかった土壌が適する。

試験場所	樹 高	樹勢	樹 姿	満開期	成熟期	1株収量	1果重	果 形	果色	糖度	試験期間
北海道農試	1.2 ^m	やや強	やや開張	5.21 ^{月日}	7.27 ^{月日}	5.7 ^{kg}	2.5 ^g	円	緑黄	13.5 [%]	1965～1975

注 1. 数値はいずれも1972～1975の4年間の平均値

2. 糖度は屈折糖度計の示度

6. キイチゴ

(1) フレミング ジャイアント (Flaming Giant)

来歴 米国キャベリア地方の野生赤色種と、ミネトンカの野生赤色種との交配種1906年発表。北海道農業試験場が1958年(昭33)に農業技術研究所(園芸部)から入手し、試作の結果1974年(昭49)に優良(準奨励)品種に決定した。

特性概要 1.樹勢は中程度で上向開張性である。樹高は1.3m前後となる。

2.熟期は「ラーザム」よりやや早く、7月下旬から8月上旬である。

3.収量は多く、1株当たり1.2kg程度である。

4.果実の大きさは中位で、平均果重は約2gであるが、大きいものは4g前後になる。

5.果色は鮮紅色で、果形は短楕円形である。

9.糖度は「ラーザム」よりやや低いが、品質は悪くない。

7.耐寒性は強い。

栽培適地と奨励態度 耐寒性が強く、また夏期に冷涼な気候を好むため、北海道全域で栽培できよう。土壌の適応性も広いが、特に有機質に富んだ砂壤土が適する。

試験場所	樹高	樹勢	樹姿	満開期	成熟期	1株収量	1果重	果形	果色	糖度	試験期間
	m			月日	月日	kg	g			%	
北海道農試	1.3	中	上向開張	6.30	8.2	1.2	1.9	短だ円	鮮紅	7.7	1969～1973

- 注 1. 数値のいずれも1970～1973の4年間の平均値
2. 糖度は屈折糖度計の示度

(2) セブテンバー (September)

来歴 米国で「マーシー」と「レーニア」の交配から得られた。1947年(昭22)発表。北海道農業試験場が1961年(昭36)に東北農業試験場(園芸部)から配付を受け、その後試作を続けた結果、すぐれた特性をもつことが認められ、1974年(昭49)に優良(準奨励)品種に決定した。

特性概要 1. 二期成り性であり、1回目の成熟期は「フレミング ジャイアント」よりやや早く、7月下旬～8月上旬、2回目の成熟期は10月上旬～10月下旬である。

2. 樹勢は中程度で、上向開張性である。樹高は1.5m前後となる。

3. 収量は、二期成り性であることもあって、ひじょうに多く、2回の合計で1株当たり2kgに達する。

4. 果実の大きさは中位で、平均果重は約2gである。

5. 果色は鮮紅色で、果形は短楕円形である。

6. 糖度は一季目の果実では「ラーザム」よりやや低いが、二季目の果実では高い。品質は良い。

7. 耐寒性は強い。

栽培適地と奨励態度 耐寒性が強く、また夏期に冷涼な気候を好むため、北海道全域で栽培できよう。土壌の適応性も広いが、特に有機質に富んだ砂壤土が適する。

試験場所	樹高	樹勢	樹姿	満開期	成熟期	1株収量	1果重	果形	果色	糖度	試験期間
	m			月日	月日	kg	g			%	
北海道農試	1.5	中	上向開張	6.25 9.7	7.30 10.16	1.5 0.5	2.1 2.1	短だ円	鮮紅	8.4 11.3	1969～1973

- 数 1. 数値はいずれも1970～1973の4年間の平均値。
2. 本品種は二期成り性のため、上段に一季目、下段に二季目の数値を示した。
3. 糖度は屈折糖度計の示度。

(3) カスパード (Cuthbert)

来歴 1865年頃米国ニューヨーク州で偶発実生から発見された。北海道農業試験場で古くから試作されていたが、その結果すぐれた特性をもつことが認められ、1974年(昭49)優良(準奨励)品種に決定した。

特性概要 1. 樹勢が強く、樹高も高く2.3m程度になる。上向開張性。

2. 熟期は7月下旬～8月下旬で、「ラーザム」とほぼ同時期である。

3. 収量は中位で、1株当たり約0.8kgである。

4. 果実の大きさは、平均1.6gと大きい方ではない。

5. 果色は濃赤色で果形は楕円形である。

6. 糖度は「ラーザム」より高く品質は良い。

7. 耐寒性は強い。

栽培適地と奨励態度 耐寒性が強く、また夏期に冷涼な気候を好むため、北海道全域で栽培できよう。土壌の適応性も広いが、特に有機質に富んだ砂壤土が適する。

試験場所	樹高	樹勢	樹姿	満開期	成熟期	1株収量	1果重	果形	果色	糖度	試験期間
	m			月日	月日	kg	g			%	
北海道農試	2.3	強	上向開張	7.6	8.10	0.8	1.6	だ円	濃赤	11.1	1969～1973

注 1. 数値はいずれも1970～1973の4年間の平均値

2. 糖度は屈折糖度計の示度

7. ウ メ

(1) 大野豊後（大野優良豊後梅）

来歴 通常、豊後梅と称されるものは、梅と杏の雑交によるもので、南は九州から北は北海道に至るまで、広く実梅として栽培されている。太平梅、増井梅、太白梅、実成豊後、柏木豊後、等いずれも豊後梅系に属する品種であるが、大分県の豊後産が著名であったところから、この名称がついたものである。夫々の地方により系統が異なり、その特性の差が北海道の風土に対する適否を左右することが判明したので、1965年（昭40）北海道立道南農業試験場で道南一円に分布する実梅を調査すると共に、府県産の豊後梅も導入し、夫々の系統の穂木により造苗し、育成比較の結果、1974年（昭49）豊後梅系の優良系統と認め優良（準奨励）品種に決定し、「大野豊後」と命名した。

特性概要 1. 樹勢は他の（豊後系）に比べて弱い。

2. 枝梢は他の（豊後系）に比べて細く、短かく、発生数も少ないが、陽面の赤色化と、皮目の少数等は同程度である。

3. 樹形は他の（豊後系）に比べて著しく開張性である。

4. 葉は他の（豊後系）に比べてやや小さく、毛茸が少ないが、葉柄の赤色化は同程度である。

5. 花は他の（豊後系）に比べて、花卉が小さく、花卉数も他の（豊後系）の5～6枚から12～15枚に比べて、丁度5枚と少なく、雄蕊数も他の（豊後系）の30～35本から40～60本に比べて、18～25本と少なく、花托の毛茸は他の（豊後系）に比べて多く、花托に光沢がない。花卉の淡紅色、萼の紅色等は同程度である。

6. 結果性は他の（豊後系）に比べて、結果期に入るのが早く、熟期も稍々早く、花粉は完全で豊富であり、自家結実歩合も高く、実用上他品種の混植を必要としない。開花期は他の（豊後系）と大差ない5月上旬である。

7. 果実は他の（豊後系）の一果重、31.0～57.0gに対して、30.9gと小果で、果形も他の（豊後系）の長円形や不規則形の多いのに対して、球形で玉揃いが良く、他の（豊後系）の縫合線が深く、果頂部の花柱痕が稍々凸出するのに対して縫合線は浅く、果頂部は平らで花柱痕が稍々凹入する。果皮、果肉其他の（豊後系）の厚いのにに対して薄く、核も小さ目である。

栽培適地と奨励態度 栽培適地は渡島、桧山、胆振、日高、後志、留萌、石狩の7支庁管内に亘ると考える。

奨励態度は、従来各地方に存在する（豊後系）の梅で、結実関係で不良なものに置き替えていくことが望ましいが、樹形が開張性のため枝梢の切返しを強くし、主枝角度を立てる等、整枝剪定面に注意を払い、枝幹の下垂、垂弱を防ぐのと、果実の成熟期が、他の（豊後系）に比べて、比較的短期間に集中するので、収穫と出荷に注意が必要である。

試験場所	果 数 (個)				果 重 (g)			
	1972	1973	1974	合計	1972	1973	1974	合計
道南農試	36	120	145	301	1,332	3,240	4,183	8,755